

地球の

なかまたち

ウィーウィー

photo by toyoasa



ある日 動物村のオランウータンさんは村のみんなを呼び集めました。

「話があるから広場へ来てくれ」

みんなは何事かと広場へ集まってきました。

「さて、全員集まったかな？」

オランウータンさんは木の切り株の上に立って見まわしました。

みんなが集まっているのを見てまんぞくげにうなずいたオランウータンさんは

「コホン」 とせきばらいをしました。

「みんなも知っているように、私はこの村を代表して外の世界をたんけんしてきた。

そのほうこく会を開きたいと思う」

オランウータンさんはそこでまたひといき入れました。



すると、一番前にじんどっていたベンガルヤマネコ氏が聞きました。

「村長でもないのに、村を代表して行ったのか？」

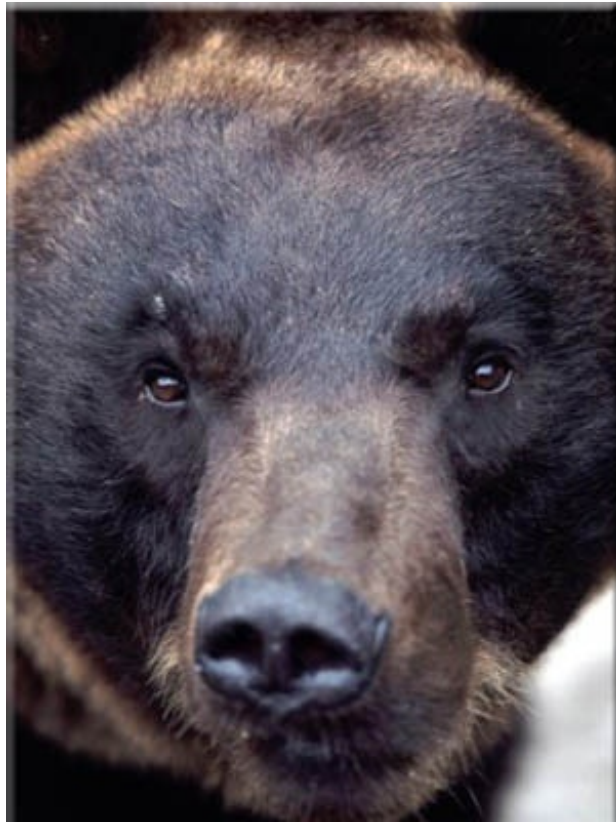
オランウータンさんは少しもあわてません。

「この村では私が一番かしこい。私の他に外の世界をたんけんできるものはいない」

みんなは感心しました。

たしかにオランウータンさんよりかしこい者はいないかもしれません。

村長のクマさんはこわい顔をしています、いつもゴロゴロと寝てばかりいます。



クマさんの頭の中は今日の食事のことでいっぱいでしたから、何を言われても怒りません。

村長さんになったのは順番がまわってきたからなのです。

村長さんになりたかったわけではありません。

オランウータンさんは話を続けました。

「私が最初におとずれた国ではウィと返事をする。みんなもウィと返事をしてもらいたい」

するとクマさんが「ウォー」 とほえました。

「ちがうちがう、ウォーではなくてウィだ」

クマさんは「ウォーウォー」 とまたほえました。

オランウータンさんはこんきよく教えます。

「ウォーではなくてウィー」



それを見ていたカピバラさんも声を出しました。

「キー」

オランウータンさんはしんぼう強く教えます。

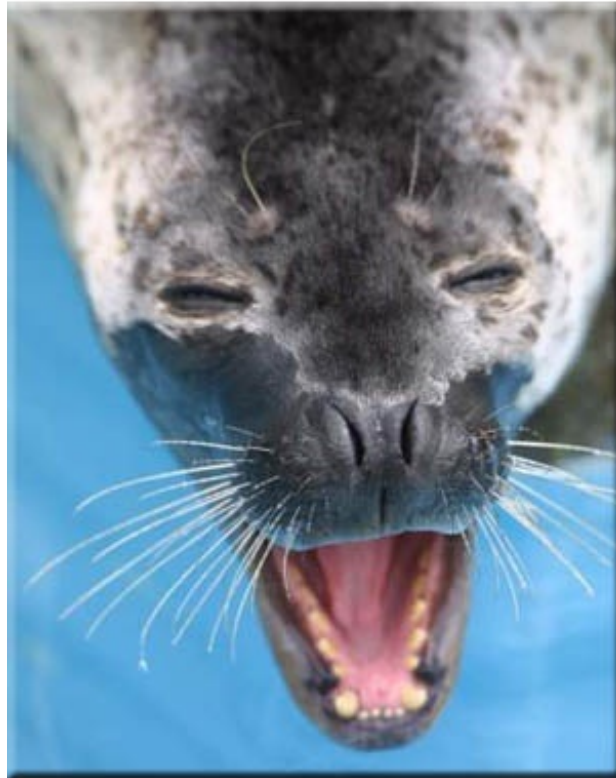
「ウィーだ。 ウィーウィー」

カピバラさんはいっしょけんめい真似をします。

「キーキー」

「そうじゃない、ウィー。ほかにできる者はいないか？」

オランウータンさんは、またみんなの顔をみまわしました。



ゴマフアザラシ氏がプールから体を乗り出して聞いています。

「ワシがやってみよう。ブオー」

自分の声にゴマフアザラシ氏は首をかしげました。

「ちょっと違うようだ。ブオーブオー」

オランウータンさんはつかれてきました。

「だから、さっきから教えているようにウィーだ。ウィーウィー」

「ブオーブオー」 とゴマフアザラシ氏。

「ウィーウィー」 とオランウータンさん。



皇帝と呼ばれているカラカル氏が低い声で言いました。

「一体話はいつ始まるのだ？」

オランウータンさんもカラカル氏にはいちもくおいています。

「みんながじょうずに返事ができるようになったら、すぐ始めます」

カラカル氏はあきれたように

「それなら私は家へ帰る。いつになっても始まりそうもないからな」

と言うと背をむけて帰ってしまいました。



オランウータンさんはあわててしまいました。

カラカル氏が帰ってしまったのは、せっかくのほうこく会がだいなしです。

「さあ、最後にもう一度れんしゅうしよう。そうしたらほうこくを始める」

そう言った時は、もうみんな帰り始めていました。

「キーキー」

「ウォーウォー」

「ブオーブオー」

と言いながら家へ急ぎます。

「ビービー」という声さえ聞こえてきました。

残っていたのは最初からねむっていたアシカさんだけでした。





オランウータンさんはくたびれはててしまいました。

ほうこくをするどころか、村のみんなに「ウィーウィー」を言わせることもできませんでした。

「あれ？」

オランウータンさんは頭がこんがらがってきました。

「ウィーウィーだったっけ？ ちょっとちがうような気がする」

そうぶつぶつ言いながら、オランウータンさんも村の階段でおひるねを始めました。

おわり